

家族は揺らいでいるのか

家族が揺らいでいる。
このごろよく、そう言われるようになった。かつての温かく安らぎに満ちた家族の関係が崩れ、個々人がばらばらになりかかっている。と、家族はいま、ほんとうに、崩壊へ向かってつき進んでいるのだろうか？

そう言いたくなる気持ちもわかる。だがそれは、錯覚だ、とまず言っておこう。家族は、これまで信じられがちな存在だったとは反対に、そもそもそんなに確固とした存在だったことはなかった。にもかかわらず、家族とはこうあるべきだという固定観念が、ひとり歩きしてしまっていた。それにとらわれていたわれわれは、そこからはみ出す事例が目立つようになると、すね、家族がどんどん崩れていく、これは大変、みだいな印象をもつてしまっているのである。

何となく、家族のどこかが変わりつつある、という印象なら、確かに誰もが抱えていることだろう。しかし元をただせば、それも、われわれがこれまで思い描いてきた家族の姿が、実は単なる幻だったということの裏返しかもしれないのだ。

家族の多様な成り立ち

家族は、人間社会とほとんど同時に生まれた、とても古い制度である。あんまり古すぎて、その起源はまったくはつきりしない。

家族は厳密に言えば、どんな動物にも、人間にもっとも近い高等猿類にさえも見られない、人間

ちであることがわかる。たとえば、中国などのように、祖先崇拜を通じた父方の系統を軸に、家族よりも大きな集団を形成するのが原則の社会もあるし、日本のように、家族よりも大きな集団がなかなか形成されにくく、親戚の範囲なども曖昧模糊としていて、はつきりした原則がない社会もある。

家族のあり方には、かなりの文化差がある。

一般的な傾向としては、(マルクス主義の歴史区分で)原始→古代→中世までの家族は、家族を超えた大きな親族集団にきっちり組み込まれていて、ほかの集団にくらべて重要なものとみなされていた。

ところが近代になると、話は変わる。社会学者はこんな法則を発見した。伝統社会では家族のあり方はまちまちである。しかし、世の中が産業社会に移行していくにつれ、それらは一様に、「近代家族」というものに変容していく。

近代家族のイデオロギー

近代家族とは、産業化が進んで、それまでの伝統家族が解体したあとに出現した家族である。形態のうえから言えば、夫婦とその子供からなる、いわゆる核家族である。

先進ヨーロッパ諸国では、このプロセスがいち早く進み、一九世紀くらいまでに完了してしまっただ。日本でも、明治後期から昭和にかけてその動きが進んだ。ほかの国々は、産業化の進み具合によつて、さまざまな段階にある。いったい世界中で、ほんとうに核家族化がこれからも進行するのか、わからないわけだが、社会学者、人類学者は

特集：浮遊する単位 [-開放と模索-]

家族 —その変容の核

橋爪 大三郎

WRITTEN by DAISABURO HASHIZUME



ANEMOS

だけの社会制度である。どうして家族があるのかは、深い謎に包まれたままだと言える。

*

人間社会に、なぜ家族が成立しなければならなかったかを考えてみる。

まず第一に、男女が結婚するという制度。

一般に、男女の結びつき(配偶)によって、新しい家族が作り出される。この結びつきは、時期を限定しない。他の動物のように、繁殖期や子育ての間だけのものではなくて、原則として一生のもの、死ぬまで連れ添うものとしてある。そして彼らが子供を育て、次の世代をつくり出す。子供が小さい間は一緒に暮らし、大きくなれば離れたり、あるいはやはり一緒に暮らし、いろいろなシステムが工夫されてきた。

さて、家族には必ず守らなければならないルールがある。近親婚の禁忌(インセスト・タブー)である。生まれた子供と前の世代の親とが再び婚姻してしまうと、家族が社会になってしまい、社会が解体してしまう。そこで必ず別の家族から、婚姻の相手を見つけていることになっていて、若い世代は常に新たな家族をうみ出し、これまで交流のなかったところにも交流の回路をつくり出していく。こうやって、小集団である家族と、もっと大きな枠組みである地域社会や村落との関係が、常に緊密に保たれることになる。ひとつの家族が単独で存在するなどということは、ありえない。

*

こうした家族は、それなりに合理性を有していたからこそ、どの社会にもあり、今日までずっと続いてきたのであろう。しかし、その具体的なあり方を見ていくと、文化によってずいぶんまちま

こうした動きは普遍的であると信じている。

*

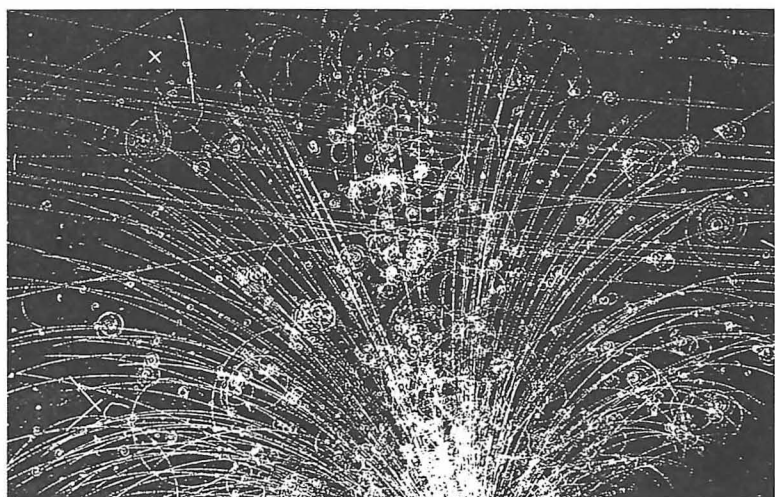
彼らの見解によると、近代家族は、産業化にもなつて必然的に生じるものである。しかしどうして産業化が進むと伝統的な大家族が壊れ、近代家族、いわゆる核家族が生まれるのだろうか？

その理由として、こんなことが言われている。

まず、生産様式の変更があげられる。産業化にともなつて、家族労働主体の農業は次第に不可能になる。イギリスのエンクロージャーに典型的なように、農業が産業化すると、農民は農地から追い出されてしまう。一方、ギルドなども解体していく。ギルドは、親が子に技術を伝え、生活を保障するシステムだった。一面で人びとの自由は拘束され、職業選択の自由もなかったわけだが、代々の職業をいわば財産のようにして、子孫に伝えることができた。しかし、こうした家業も、新しい生産様式によって破壊されていく。農業は機械化、大規模化され、家業(職人の世界)も機械化され、工場制労働になっていく。

近代の新しい生産様式は、生産者としての家族を破壊した。誰もが賃労働者となつて、自分の家では働かず、工場に働きに出かけて行く。こうして、家庭と職場が分離する。主に男性の稼ぎ手が家計を支える。一家の生活資材(消費財)は市場で購入しなければならぬが、こうした消費財も多くは工場でつくられたものだ。こんなふうにしてどんどん、市場経済、資本主義経済が発展していった。

労働者は職を求めて先祖伝来の土地を離れ、都市に移動し、工場の近くに住宅を求める。都市がどんどん大きくなる。そうすると彼らのために、



ANEMOS

工員向けのアパートとか、分譲住宅とか社宅とかがたくさん建設される。このようにして、われわれが知っている家族のイメージ、都市生活の原型が生まれてくるのだ。

* こうした動きにつれて、親と子供の関係も変質する。

近代家族の場合、親は子供に農地も家業も残すことができない。としたなら、よりよい労働者として生活していけるような能力を身につけさせる以外にはない。そこで、子供への教育熱が高まっていく。都市労働者は、自分の子供の教育をまづまづ先に考えるのだ。ヨーロッパは階層のはっきりした社会なので、この点はそう顕著でないが、少なくとも日本では、教育熱は非常に高まった。都市労働者が子供に残せるものは、教育であり、それを保証するのが、学校制度である。学校もまた、国家のコントロール下におかれるものとなった。こうしてそれ以前と異なり、子供は家庭の中でいつくしまれ、教育される存在となった。

* また、男と女の関係も変化した。

近代家族の主たる家計維持者は、結果的に男性となった。それまで家業を支え、農地とともに働いていた女性たちは、近代化が進むにつれて、しだいに専業主婦というものになっていく。ある時期に、女性が社会から退いて、家庭の中に入ってしまうという動きが起こる。ヨーロッパではだいたい、十九世紀から二十世紀のはじめにかけて、専業主婦の存在が一般化した。これは、近代家族のもたらしたものだ。家族の普遍的なイメージとむすび付けられて、流布していく。女性がいち

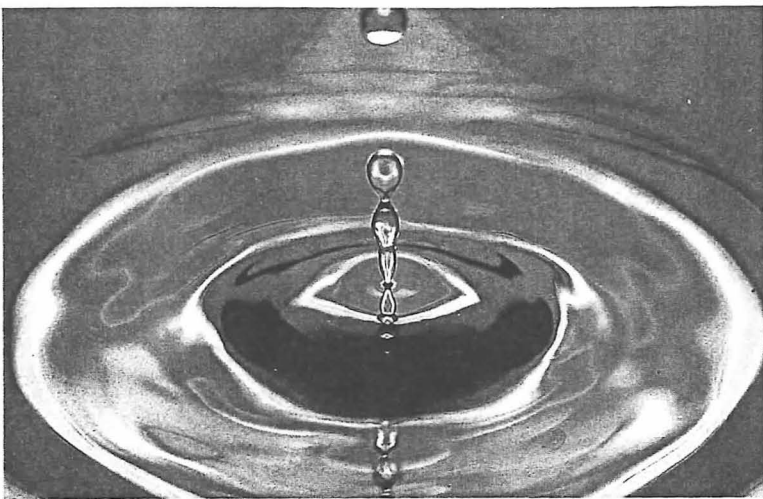
もともとイギリスなどでは、伝統社会であっても核家族の割合がかなり高かった。そういう素地があるから、近代家族⇨核家族⇨家族の原点、という考え方はなだ受け入れられやすい。しかしそれは、控えめに言っても、思い込みというものだろう。近代家族は、家族のあり方のワン・オブ・ゼムではない。歴史の制約のなかで生まれた一形態にすぎないのである。

*

日本ではどうだったか。日本の場合も、核家族の割合はじつはかなり高かった。

伝統社会の家族形態は、「家」とよばれる。武士は労働が禁止されていて、消費単位であり、定額の俸給を受け取るサラリーマンだった。もしも後継ぎがいなければ、どんなことをしても後継ぎを見つけてこなければならぬ。そうやって、「家」の継続性は保たれていた。血縁でなくていいのだから、これは厳密に言うと、制度であって家族ではない。

「家」は家族ではなかった(制度だった)からこそ、家業や土地との関連を失ったあと、急速に崩壊していくしかないはずのものだった。しかし明治期の日本は、この制度をイデオロギーとして永らえさせ、すべての家族にそれを強制した。明治民法のもとで法的にも裏づけられた日本の家族は、「家」というイデオロギーと、親夫婦/子夫婦の同居という形態で存在した。つまり日本では、大家族が近代化され核家族になったとは意識されずに、家制度がまだ続いているとイメージできたわけだ。武士的家族の延長上に、天皇制下の家制度もイメージでき、そこに大きな齟齬があることは隠されたのである。

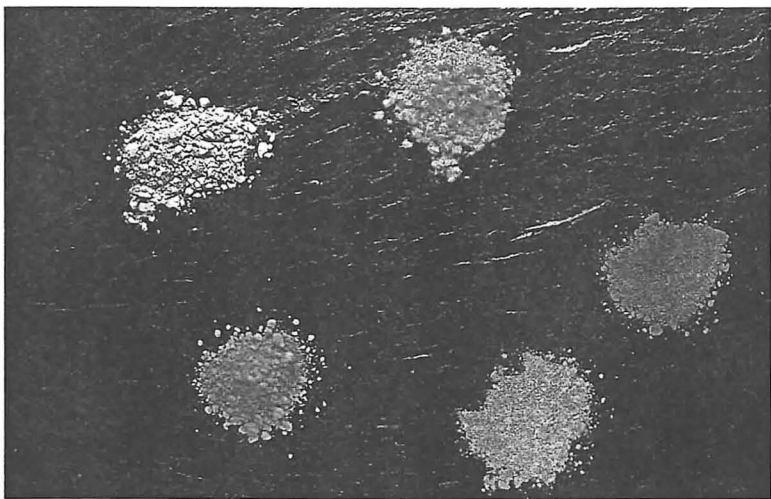


ANEMOS

ど家庭に引っ込んでから、もういちど出てくるまでに、かなり時間がかかる(数世紀経過する)というのが、先進西諸国に共通する傾向である。これに対して、遅れて産業化した国々ほど、女性が専業主婦となって家庭に引っ込んでから、社会進出し始めるまでの間隔がどんどん短縮し、ついには二つの時期が重なってほとんど目立たなくなる、という現象があるという。日本では専業主婦が大量に登場するのがようやく高度成長期、そのあとすぐ七〇年代から女性の社会進出が始まって、専業主婦の時代が比較的短かった。もっとあとから産業化した国では、専業主婦の時代がなくなってしまう。そのほか、社会主義諸国の一足飛び社会主義化⇨女性の社会進出をどう考えるかも、面白い問題だ。こうした論点については、落合恵美子氏の詳細な研究を参照してほしい。

ステレオタイプの家族イメージ

こうして、国ごとに時間差はあるものの、どの国でも近代家族が生まれていったことよって、われわれは家族についてのステレオタイプのイメージを抱くことになった。家族はそうあるべきものと、信じこむようになった。その結果、そこからはみ出すものは、家族ではないとか、そうした現象は家族の解体であるとか、あるいは家族の揺らぎであるとかと、すぐ考えてしまう癖がついてしまった。たまたま世界各国で、いろいろな家族がみな近代家族化していくという「現実」を目撃したがゆえに、これが家族の本来の姿だ、核家族こそ家族の究極の姿だ、と思い込んでしまうのである。



ANEMOS

近代家族は変容する

こうして日本でも、近代家族が遅ればせながら根づいていったわけだが、しかし、ほんとうに世界中がそろって、絵に描いたような近代家族のパターンに従っていったのかどうかは疑わしい。それに、近代家族は誕生してからもずっと、実は変化を続けている。専業主婦が家庭を守り、数人の子供たちに愛情を注ぐというパターンにしても、近代家族の絶対条件というわけではなく、歴史のなかで一時的に成立したものである。

まず、専業主婦が定着してしばらくすると、今度は女性の大きな社会進出(労働力化)が始まる。アメリカでは一九二〇年代に、特にこれが顕著になった。女性も専門職に就き、独立した収入を得て、共働き世帯も増加した。

この傾向に弾みをつけたのは、戦争だったと言われている。事務員、工員、教師、……。男性たちが戦場に出かけたあとを、女性の新規雇用が穴埋めした。

この傾向は日本にも当てはまる。戦争がたけなわの頃には、大日本国防婦人会とか、勤労動員とか女子挺身隊とかいった社会参加のチャンスが増え、男性の抜けた穴を女性たちが埋めていった。お姑さんの顔色を気にしないで、お国のためな

ら堂々と家を空けられる。戦争は結果的に、女性の社会的行動力を強化していったのである。似たような動きは、ほかの国々でも同様であった。

それ以来、女性の社会進出はとどまるところを知らないようにみえる。教育を受ける段階では、あまり男女に差はない。けれども、就職して仕事を持つようになると、女性は子供を産むので、男性との間に大きな差がつくようになる。仕事のうえで、男女に大した違いがないにもかかわらず、である。ここに、近代家族の矛盾が集中的にあらわれてくる。

戦後の民主教育は、男女平等をさんざん教えた。学校に在る限り、男女差別を実感することは少ない。そこですっかりその気になって、いざ社会に出、家庭に入ると、いろんな壁がある。ことにやっとなつて、愕然とする。

だから、フェミニズムが生まれてくるのは当然だ。これは明らかに男女差別であり、世の中が間違っている、と。女性の自立性が高くなっている割には、社会がまだ変化していない。そのギャップを埋めていくために、フェミニズムはどんな国でも必然的に生まれてくる運動なのだ。

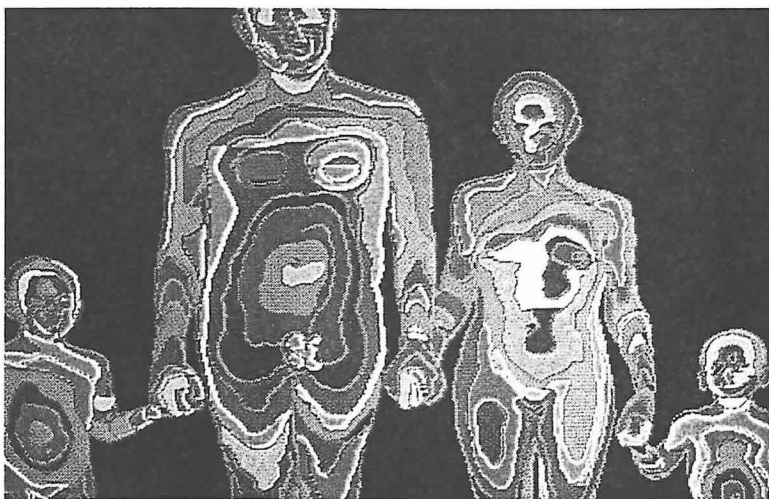
加えて最近では、生まれる子供の人数もどんどん減っている。

産業化によって社会構造が変化すると、社会は多産多死型から少産少死型へと移行するのだが、同じ少産少死と言っても、より所得が高くなり、女性が社会的自由を得たいとか仕事を続けたいと

る、愛情がなければ結婚は成り立たないと考えるのだ。日本でも、見合い結婚はすっかり廃れてしまい、結婚の前提は愛情という考えが主流になった。しかしこれは、裏を返すと、愛情がなくなったら家族でいるよりは別れたほうがいいということになる。愛情の消滅がすなわち結婚の解消に直結してしまう。

家族とは本来、役割なのである。夫や妻、父母、子供といった役割の束である。役割とは、言い換えるなら義務である。自分のやるべきことを果たしていけば、家族は（少なくとも形だけは）維持できる。しかし、そうではなくて、心（愛情）が必要なのだ、形だけではだめなのだ、ある時期から強硬に言われはじめた。したがって、愛情がなくなると本人たちが思ってしまった瞬間に、その家族は崩壊してしまうことになる。

アメリカでは、再婚も増加した。離婚の理由は愛情がなくなったからであり、家族が嫌になったからではない。だから、愛情を持てる相手に再びめぐり遇えれば、もう一度家族になれる。それぞれに連れ子のいる再婚も珍しくなくなった。それからまた離婚し、また再婚するケースもある。連れ子同士はハーブラザー、ハーシスターなどと言い、その関係はやたらと複雑になってくる。アメリカの学校では、クラスの半分以上がそういう子供だったりする。子供たちもすっかり慣れてしまつて、あんまり気にしなくなった。



なつたのだ。同じ時期に、セクシュアル・マイノリティの人の主張も強まってきた。例えばサンフランシスコのゲイ・ビープルは、人口の四分の一に及ぶと言われており、彼らの支持なしには市長選挙では当選がおぼつかなくなっている。そして彼らも結婚して家族をもつ権利、子供を育てる権利を主張している。

こうした動きから生まれてくる家族は、確かに従来の意味での核家族ではない。近代家族のイメージをはみ出している。したがって、こうした動きに危機感を抱く声も強くなっていく。

アメリカでは、家族はますます目茶苦茶になっていって、あと二〇年も経てばすっかり消滅してしまうだろうと予測する学者さえいた。七〇年代を通じて家族の価値が低下していったので、八〇年代にはレーガン大統領が登場し、新保守主義を掲げて、家族への復帰、伝統的価値の大切さを訴えた。これに、爆発的に拡がりはじめたエイズの恐怖が後押しをした。それやこれやで、人びとは家族の価値を見直すようになった。

アメリカの家族保守主義は、ある程度成功したと言えるかもしれない。しかし日本の場合、もとも家族の価値観が不鮮明だったこともあって、いろいろな動きがごちゃ混ぜになったまま、あいまいなカタチで推移している。

家族は「核分裂」する

日本ではまだ、未婚のペアが増えたり未婚の母が増えたりといった急激な変化は見られない。し

かいう要求をはっきりさせるようになると、ますます少産化の傾向が進んでいく。こうして、同じ核家族でも、最近では前よりサイズが小さい核家族が主流だ。子育ても昔よりずっと早く終わる。その代わり子供が一人前になるまで、大学に行ったりけつこうお金もかかるわけだが、そこですますます専業主婦などしていないでパートに出ようということになる。

性のモラルの変化

もうひとつの大きな変化は、性のモラルが目に見えて緩んできたことである。これは、若い世代ばかりでなく、親の世代でも同様だ。かつては夫婦だけが唯一のセックスの相手と、それ以外のパートナーはプロ（水商売）と相場が決まっていたのに、どちらでもない形がこの数十年の間にどんどん増えてきた。

欧米では六〇年代、日本でも七〇年代の半ばごろから、性モラルの顕著な変化が起こった。

例えば、スウェーデンでは、結婚しないカップルが非常に増えた。未婚の母（シングルペアレント）も含めると、赤ん坊の半分はこうした親から生まれる計算だ。必ずしも結婚という制度を前提としない男女の関係が実質化しているわけだが、近代家族が家族だと考えると、これは家族でないことになる。

アメリカや旧ソ連では、離婚の増加が大きな社会問題となった。アメリカの場合、離婚の原因のひとつとして見逃せないのは、愛情の価値が強調されすぎたことである。愛情があればこそ結婚す

か、見のがせない変化がひとつある。それは、単身世帯の著しい増加である。

婚姻率が少しずつ下がり、婚姻年齢もかなり上がってきている。このため、若年層はもろろん中年の単身者も増えた。それに、平均寿命の延びによる老人一人暮らし世帯の増加も重なって、こうした傾向はますます強まっていくと予想される。

最近の大都市圏では、昔ながらの核家族世帯の比率が、少しずつ減少しているように思われる。これに、親元を離れて一人で暮らしている学生やOL、社会人（必ずしも統計に出てこない）を加えると、かなりの人びとが単身世帯として暮らしていると言えそう。

こうした現状は、核家族の「核分裂」とも言えるものだ。単身世帯はそれぞれが、核家族に対する素粒子（パーティクル）のようなものとして存在している。核家族はもう、社会を構成する最終単位ではなくなつて、もう一段階細かなものが、都市の基本構成単位となつてきているのである。外見上核家族である世帯でも、同様の変化が進行していると考えたほうがいい。

単身世帯は、もちろん昔からあったのだが、それらが積極的に自己主張を始めた点が新しい。しかも、ひとつのライフスタイルとして社会的な承認を得るまでになった。ひとり暮らしの若者は、ワンルームで、フローリングの床で、コンビニで買い物をして、DCブランドのスーツを着こなし……と、ひとつのイメージさえも固まってきた。高年齢単身者のほうは、まだそこまでいっていないが、これも時間の問題だ。行政としても、こうした根本的な変化にきちんと対応していかなければ



ならないという情勢が生まれてきている。

こうした現象が、都市の、特に消費生活を変動させている。

単身者(特に一人暮らしの若者)の生活行動は、核家族の場合と多くの点で異なっている。まず、時間が変動的だ。読む雑誌が違ふのはもちろんだが、観るテレビも時間帯からして異なる。

消費動向も独特である。コンビニの隆盛とその利用のされ方は、これを典型的に表している。レジャーのあり方もしかりである。そして、特定の高付加価値の商品に強い需要を示したりもする。

都市には、彼らをターゲットとしたエリアができてき上がり、消費のセグメント化が進んでいる。そうした動きの中心には、核家族があるわけではない。核家族はもちろん、消費市場の主要なターゲットとして残されているが、高付加価値の商品を購入する弾力性に乏しい。

家族の変容が言われているが、その変容のなかみは、いまのべたようなことである。社会の単位がどんどん個人化しているのである。

その意味で、確かに「近代家族」は大きな曲がり角にさしかかったと言えるだろう。しかし、そのことが「家族」の崩壊を意味するかというと、必ずしもそうではない。

確かにこうした傾向が、この先どこまで進んでいくのか、実のところはわからない。しかしそれは、本来あった平均的なものからの逸脱の割合が単に目立つようになっただけ(基本のところは同じ)とも言える。それだけ、近代家族のスタンダードの規制力が強いのだ。もともとこうした

とに貸すのはうまみのないビジネスになった。政府が持ち家政策をとったこと、銀行が土地を担保に金を貸したこともあって、値下がりなしの土地神話が生まれたのである。

高度成長期に都会にやってきたサラリーマンには、生活のための住宅が早急に必要だった。彼らは一戸建ての住宅を手に入れることを、生涯の目標にした。こうして日本では、持ち家・一戸建て住宅という容れ物が、核家族・近代家族とセットになっていった。もちろんそこには、アメリカの郊外型ライフスタイルのイメージが重なる。持ち家・一戸建てでないとちゃんとした家族ではないという感覚が、なんとはなしに形成されていったのである。

家族の領域／個人の領域

そしていま、近代家族の核分裂が始まった。一戸建て住宅という外見はそのままでも、その実態は、ひとつの家族という理念を失って、個室(ワールーム)の集合体という性格に変わってきている。

どの部屋にもテレビがあり、どの部屋にも電話がある。そろそろ、どの部屋にもパソコンがあるという時代だ。電子レンジとレトルト食品の普及で、みんなが別々の時間に食事をとって何の不都合もない。そうなる、どこが家族なのかもだんだん怪しくなってくる。家族がばらばらになってしまったという感覚が生まれてくる。だから、家族であることを確認するために、ときどき一緒に食事をしたり、みたいなことをわざわざしなくてはならなくなる。これは多かれ少なかれ、どこ

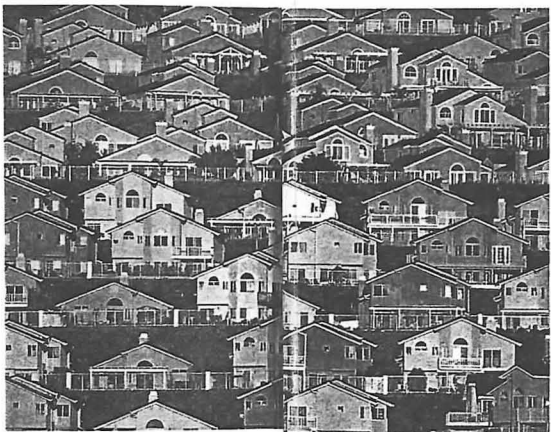
例外というのは、どんな社会にもあった。スタンダードの中にあつた例外が、たまたま消費社会状況のなかで増幅されて、大手を振って歩くようになっただけでも言えるのだ。

結局のところ、現在の家族を論じるのに、ある固定的なイメージをもたして、それが危機的状況をむかえたと言ってみても、さほどの意味はないということになる。むしろその変容の核をしっかりと見定め、家族の成立ちをその根本から考えたいことが大切だ。

住空間の原イメージ

単身者世帯の増加に代表されるような近代家族(核家族)の核分裂は、家庭の内部でも同様に進行している。家族がこうして変容すれば、家族の生活空間である住居のあり方も、変わってくるのは当然だ。

主たる稼ぎ手が夫であった間は、夫の職場との位置関係が、住居の形態を決める一番の要因だった。しかし、いまは妻の仕事の重要性が夫のそれに匹敵する場面があり、さらに子供の学校のことなども合わせて、決定要因の数が増えている。家族のあり方を決める変数が錯綜しはじめている。したがって、家族のメンバー各人が自己の達成を



の家庭でもそうなのだ。生活パターンばかりか、最近の住宅はその構造も、個室の集合体という造りになってきているのではないか。

だとしたら、たとえばこんなことだとして考えられる。はじめから個室の集合体として、集合住宅や個別の住宅を設計してしまう。集合住宅だったら、入居世帯数を予想してそれに合わせた数の台所をつくり、あとの部屋は、開けるドアの方向によってどの住居に属するかが決められる、といった設計にする。子供が成長したら、個室をひとつ回してもらって、子供部屋にしてもいい。部屋数の増減は、各世帯の家族サイクルが少しずつずれているとすれば、全体として調整されていく。

こんなふうにつくっておけば、住人それぞれに自分の家であるという愛着も生まれるし、建物自体も共同できちんと管理されて何十年も使える。どの家族も、それなりの家族サイクルをもち、そのときどきで異なった機能を果たしている。そうした存在に、固定したスペースを買い取らせ、しかもそれに何十年もかかるようなローンをかぶせるというのは、あまりにも負担が大きすぎるだろう。そんなやり方はやめて、家族のためのフレキシブルな空間構成を考え、それに対応できる良質な集合住宅をつくっていくことが大事ではない

重要視すると、ある時期には一緒に暮らすけれども、ある時期には一緒に住めないということも当然多くなってくるだろう。別な言い方をすると、一つの家族と一つの住宅とが必ずしも対応しないということになる。

そのため、家族のモデル(人員構成)に合せて住宅を設計・供給していけばいいという考え方は、いまや完全に時代遅れのものになった。戦後の一時期ならそんなやり方でも通ったかもしれないが、消費社会以後の日本社会の実態にはますます合わないようになってしまった。

住宅は本来、家族のライフサイクルよりも長もちするものである。

かつての農村の民家は、百年や二百年はもつようにつくられるもので、別段家族構成に合わせて建てられるものではなかった。江戸などでは火事があまりに多いので、べらべらの安普請の長屋を建ててすませていただけで、日本中がそうだったわけではない。

ヨーロッパでも、石で造った何百年もつ建物は、原則的に家族に合わせてつくられたものではない。狭すぎたり、広すぎたり、どうしても都合なときには引越した。だから、ヨーロッパの都市生活では、賃貸が普通である。結婚当初は二人暮らしで、子供が成長すればもう少し広い間取りに移り、老夫婦だけになったらまた引越す。そんな具合で、家族のライフステージに合わせてその都度、住居を選んできたのである。

日本も戦前までは、賃貸の住宅がかなり多かった。有名な文学者なども、たいていは借家に住んでいた。戦後、借地借家法が改正されて、家をひたすようになった。

どの家族にもその家族なりのライフスタイルがある。家族の人数も、頻繁に変動するだろう。

家族から出たり入ったりする、ひとりの人間に焦点をあてて考えてみれば、どこに住み、何をやるのかといったライフスタイルはそれこそ多様であり、自分自身でさえも今後のことは予測がつかない、それくらい自由である。そのなかで、自分が一番やりたいことを求めていくのが人生だ。それを支援するような社会制度が必要だし、それにふさわしい居住空間も必要となってくる。

家族とは、個人が同意してつくっている集合体である。小さな子供は別として、嫌なら別々に暮らすことができる。そしてそのメンバーは、必ず変動していく。これからの時代は誰しも、自分ひとりで住まい、自分ひとりで生きていくという覚悟をもって、都市生活を送っていかねばならないのだろう。

家族の一員であること、個人として生きていくこと。この両面をサポートすることは、これまでのような家族のイメージに縛られ、そうした家族の需要を満たしていればいいといった考え方は困難である。それを踏み越えた発想が必要である。

個人が個人として生きていくのは、本当はかなり厳しいことだ。しかしいやおうなしに、そうした時代は始まっている。もはやわれわれは、家族があまりにも家族(実は近代家族)らしかったあの時代の幻を、いつまでも追い続けていくことはできないのである。